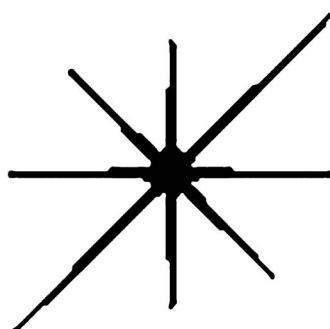


# コメット通信 59

[ '25 年 6 月号 ]



*comet book club*

éds. de la rose des vents - suiseisha

目次

|                     |   |
|---------------------|---|
| 引き継がれる諷刺漫画のアクチュアリティ |   |
| ヤマト・デヴィッド           | 3 |

|              |   |
|--------------|---|
| 【特集 笑いを学問する】 |   |
| 笑い学ミニミニ小史    |   |
| 森下伸也         | 5 |

|            |   |
|------------|---|
| 『笑いの哲学』その後 |   |
| 木村覚        | 7 |

|           |   |
|-----------|---|
| 笑芸と「限界学問」 |   |
| 鈴木亘       | 9 |

|                |    |
|----------------|----|
| 可笑しみを通して自己に気づく |    |
| 八重樫徹           | 11 |

|                   |    |
|-------------------|----|
| 笑いとユーモアの4段階と滑稽の理論 |    |
| 雨宮俊彦              | 13 |

# 引き継がれる諷刺漫画のアクチュアリティ

ヤマト・デヴィッド

1958年に開催された「4人のマンガ家展」に関する展評において美術評論家の中原佑介は、漫画をギャラリーの壁に展示する必然性が欠如していると鋭く批判し、「4人のマンガ家展」を含め、50年代当時に漫画界で展開された一連の「芸術」領域への接近を試みる運動が漫画のメディアとしての本質を見落としていることを指摘した<sup>(1)</sup>。漫画をタブローとして壁に展示することは漫画の「アクチュアリティ」、すなわち「読み捨て」られるメディアとしての性質を放棄してしまうという中原の問題提起は簡潔ながら的確であり、戦後から1970年までの間で顕著となった諷刺漫画の衰退<sup>(2)</sup>を象徴する重要な指摘となった。

1950年代における子供漫画の人気の高まりや劇画の登場、更に低俗漫画の「はんらん」<sup>(3)</sup>と形容される状況に漫画集団に属する漫画家や在野の評論家たちは行動を起こした。彼らは「マンガも芸術である」というスローガンのもと、戦前の岡本一平や東京漫画会の試み<sup>(4)</sup>を受け継ぎながら、諷刺漫画を「芸術」としての地位に押し上げることを目標に活動していくようになったのだ。

近藤日出造や清水崑らは、1951年に二科展漫画部を創設。1955年には文藝春秋漫画賞を設立し、自らのビジョンを制度化した。須山計一や伊藤逸平ら批評家は漫画を「思想の芸術」<sup>(5)</sup>として再定義する評論活動を行った。これらの試みは諷刺漫画の芸術的価値を高める成果を挙げたが、漫画の内的本質を重視しすぎるあまり、読者との関係性や市場との相互作用という外面的要素を軽視する結果となった。

この内的本質を追求する流れの中で、「4人のマンガ家展」に参加した久里洋二・井上洋介・長新太・真鍋博の実験的作品は、視覚芸術としての漫画を探索する試みとして注目を集めた。絵画のように完結する表現を目指した彼らの作品は文章・台詞・タイトルのテキストに依存せず、政治的・社会的な諷刺漫画とは一線を画していた。このイメージ中心の表現はイラストレーションの分野で一定の評価を得たが、一方で従来の漫画市場や読者層との乖離が生じた。戦後の日本では経済復興とメディア環境の変化が進み、その過程で諷刺漫画の社会的影響力は徐々に低下していった。かつて新聞や雑誌などの活字メディアが主要な情報源であった時代、諷刺漫画の短く鋭い表現は人々の生活に密着していた。しかし、世代交代や娯楽の多様化により漫画の消費スタイルや機能は変化した。従来の諷刺漫画ではもはや市場や読者のニーズに応えきれなくなっていたのだ。

だが21世紀に入り、諷刺漫画は新たな転換期を迎えた。インターネットの普及とその後のSNSの台頭は漫画の在り方を大きく変えた。Twitter（現在はX）やInstagram、TikTokなどのプラットフォームは断片的で短いコンテンツを重視し、情報過多の現代における「ファスト娯楽」が集積する場となっている。これらは戦後の新聞・雑誌が持っていた「読み捨て」られるメディアの特性を彷彿とさせ、諷刺漫画の外面的本質を再現する上で重要な機会となった。

今日のSNSで特に注目されているのが「現場猫」<sup>(6)</sup>・『ちいかわ』・『おばんちゅうさぎ』などの作品群である。これらの作品は短くインパクトがあり、諷刺漫画の内的本質と「読み捨て」られるメディアとしての外面的本質が巧みに融合している。SNSが浸透した時代に生きる人々の短時間での消費スタイルに適い、簡潔で効果的なユーモアを提供している。

特に『おばんちゅうさぎ』は50年代のイラスト的漫画に近い特徴を持ちながら、現代の日常に潜む不条理や不幸をユーモラスに描いている。タイトル通り、白いパンツだけを身に着けたピンクのウサギが主人公のこの作品は、テキストなど複雑な文脈に依存しない。主に二コマ形式で展開され、一コマ漫画や短編アニメーションなど多様な形式でも魅力を発揮している。他人の不注意によって食事を食べ損ねるなど、誰もが経験しうる日常生活で生じる理不尽をナンセンスと諷刺でもって普遍的に共感・共有されるユーモアに変換し、描いている。この『おばんちゅうさぎ』の形式と描写の性質は、漫画の「読み捨て」という本質に回帰しつつ、今日のSNS時代の習慣や需要に深く共鳴している。

戦後、大人漫画の作家たちは芸術としての諷刺漫画を確立させる試みのため内面的本質に固執するあまり、読者との相互作用や日常生活における機能を軽視した。しかし、諷刺漫画の興隆と衰退で重要となるのは漫画の内面的本質以上に人々の習慣やニーズ、つまり読者との関係性や社会的文脈に寄り添うことであると『おばんちゅうさぎ』が証明している。

芸術は孤立した洗練によってのみ価値を持つのではなく、社会や時代の変化に適応し続けることでこそ意義を持つ。諷刺漫画もまた現代の文化的・社会的ダイナミクスに柔軟に対応し、新たな形でその役割を果たしているのである。

#### 【注】

- (1) 中原佑介「期待はずれ『4人のマンガ家』展」(『読売新聞』1958年8月21日夕刊, 3頁)。
- (2) 川崎市市民ミュージアム「戦後②風刺漫画の推移」(『日本の漫画300年展解説図録』, 145頁)。
- (3) 伊藤逸平, 須山計一「世界のまんが」(『美術手帖』1954年4月号, 39-54頁)。
- (4) 鈴木麻記「大正期における漫画の両義性と社会的布置——漫画家集団『東京漫画会』を事例として」(『マス・コミュニケーション研究』88号, 2016年, 124-125頁)。
- (5) 伊藤逸平, 須山計一「世界のまんが」(『美術手帖』1954年4月号, 54頁)。
- (6) イラストレーター・くまみねによる猫をモチーフにしたキャラクターをSNSユーザーが労災現場を諷刺するネットミームとして二次創作したもの。この「現場猫」をくまみねが逆輸入し、労働災害の注意喚起を目的とする「仕事猫」が生まれた。

執筆者について——

ヤマト・デヴィッド 現在、関西外国語大学外国語学部非常勤講師。専攻＝美術史、日本マンガ史。主な論文には、「もうひとつの漫画史——1950年代における大人漫画業界の動向とクリヨウジの実験漫画をめぐる」(『現代思想<sup>+</sup> 久里洋二』, 2025年) などがある。

【特集 笑いを学問する】

## 笑い学ミニミニ小史

森下伸也

「笑いを学問する」というお題にピッタリの学会がある。日本笑い学会という。私は前会長として、この場を借りて大いにその宣伝をしたいのだが、そのまえにグッと時代を遡って話を始めることにしよう。

メソポタミア、エジプト、インダス、中国と、古代の四大文明どこでも学問があったが、笑いの学問の存在は寡聞にして知らない。私の知る限り、世界で最初に笑いに関する集中的思索を始めたのは古代ギリシャのアリストテレスである。いまから 2400 年も前のことだ。このひとは凄い。たとえば『動物部分論』では「笑う動物は人間だけである」とのべて、その生理学的な理由を説明し、『弁論術』では「予想外の言葉の展開が笑いを生む」とユーモアの本質を分析し、『ニコマコス倫理学』では笑いの中庸の徳を説き、『詩学』では喜劇の起源を解明し、ときわめて多面的に深く鋭く笑いを論じた。「万学の祖」はまた笑い学の祖でもあった。それから今日までヨーロッパでは、綿々と笑いの学問が続けられてきた。

とはいえ、中世の時代、笑い学は 1000 年近く休止を余儀なくされていた。映画にもなったウンベルト・エーコの傑作『薔薇の名前』でよく知られているように、中世ヨーロッパではキリスト教会によって笑いそのものが禁じられたために、笑い学などありえようもなかったのだ。けれども、ルネサンスで笑いの禁制が解けると、春になって野山に一齐に花が咲くように、笑いの文学が咲き誇った。エラスムス、ラブレー、セルバンテス、シェイクスピア。世界史上最強の「道化の文学」である。

いささか遅れて近代哲学が誕生すると、同時に笑い学がよみがえった。劈頭の代表格はホッブズとデカルトである。ホッブズは国家論『リヴァイアサン』（1651 年）のなかで「笑いは他人の欠点や失敗を見て優越感を得るところから生まれる」と笑いの性悪説を展開し、デカルトは『情念論』（1649 年）のなかで、笑いは情念に脳が反応して生まれる筋肉運動だとして、脳の中で情念が生成し笑いに変じる過程を、動物精気や松果腺といった概念を駆使して分析した。内容的には時代の制約を免れないが、笑いの脳科学の立派な先駆者である。

大哲学者に倣ってか、そもそも哲学者は笑いがお好きなのか、彼ら以降、笑いとはユーモアは哲学の定番メニューとなった。大物だけ列举してもスピノザ、カント、ジャン・パウル、ヘーゲル、ショーペンハウアー、キルケゴール、ハーバート・スペンサー、ニーチェ、ベルクソンと、錚々たる顔ぶれである。どれもこれも面白いのだが、ここではホッブズの少し後輩でイギリス啓蒙思想の嚆矢、シャフツベリー 3 世伯を取り上げておこう。主著『人々、風習、意見、時勢等の諸特徴』の第 1 巻「機知とユーモアの自由」(1711 年)には、少なくとも 4 つの大きな歴史的功績がある。それは、①それまで「体液」を表わす医学用語だった「ユーモア」という言葉を「おかしなもの、笑いのもと」という意味で用いたほぼ最初の事例となっている。②ホッブズの時代まで主流だった笑い性悪説を全面的に否定し、笑いを道徳的に善きものとする笑い性善説を唱えた（以後これが主流となる）。③機知とユーモアの自由を言論の自由の基本ととらえ、④これに関連して「ジェントルマンにはユーモアを」という価値観を確立した。この衣鉢をついで、イギリス啓蒙思想の孫世代にあたるアダム・スミスが『道徳感情論』（1759 年）のなかで笑いの社会心理学的考察を緻密に展開しているのも興味深い。

さて、これまで笑いを学問的に論じてきたのは哲学者と言われる人たちであったが、すでに17世紀には科学革命が起きており、しだいに哲学者に替わって科学者が笑いを学問するようになった。たとえばフランス啓蒙の集大成『百科全書』（1751-1772年）は、意外にもその先駆者である。驚いたことに、ここには「笑い」という特大の項目があり、当時の最先端の医学・生理学的見地から笑いのメカニズムが分析されているのだ。だが笑いの科学の本格的創始者となれば、それは100年ほど後のダーウィンであろう。彼は『人および動物の表情』（1872年）のなかで笑いの進化を論じ、人間だけでなく霊長類も笑うのだと、2000年来の権威、アリストテレス説に反旗をひるがえしたのである。そしてしばらく後にはフロイトが現われ、『機知——その無意識との関係』（1905年）で笑いをきめ細かく精神分析することになる。

それから100年あまり。科学は驚異的に発展した。科学発展の基本原理は専門分化である。笑い学も専門分化した。動物学、生理学、医学、精神医学、脳科学、心理学、社会学、文化人類学、歴史学、民俗学、言語学、文学などなど、そして哲学。各学問も多岐に細分化が進んでいる。よく言われるように、その結果、あまりに研究が細分化すると、研究対象の全体像が捉えられなくなる弊害が生じる。そこで、これを憂えた各分野の笑い研究者たちが、1976年、みんなの知見を持ち合って笑いの全体像を明らかにしようと学会を立ち上げた。国際ユーモア学会という。国際的にして学際的、年に4回『ユーモア』という学際誌を刊行し、年に1回、世界のどこかの大学で4,5日間研究大会を開き、笑いとうーモアについて丁々発止する。参加者は百数十人といったところか。私も社会学者として何度か出席し、「古事記の笑い」「日本の笑い祭り」「セックスはなぜ笑えるのか」といった研究発表をしたことがあるが、一番多いのは心理学の研究者と見える。ちなみに今年の会場はポーランド・クラクフのヤギェウォ大学。コペルニクスの母校だ。

その支店というわけではないが、1994年、日本でも笑い好きが集まって、「お笑いのメッカ」大阪で日本笑い学会というのを創立した。純学術系の国際ユーモア学会に対し、こちらは「市民参加型」が謳い文句で、職業横断的なお笑い好きクラブという顔をもっている。『笑い学研究』という年刊誌を刊行し、毎夏全国大会を開催しているが、「笑わしたるか」志向の研究発表が多いのが特徴である。とても愉快的集いなのだが、残念ながらコロナ禍以降、会員が急減し、現在は約600人になっている。

おやっ！ いよいよこれから宣伝と思ったところで、もう紙幅が尽きてしまった。でも、毎月大阪でオープン講座を開催しているし、全国16の地方支部も活発に活動している。読者諸氏には、ホームページやフェイスブックを参照され、ぜひ足を運び、大いに笑っていただきたい。そう、ほかでもない、これがいちばん私の言いたかったことなのであった。

執筆者について——

森下伸也（もりしたしんや） 1952年生まれ。関西大学名誉教授。専攻＝社会学，ユーモア論。主な著書には、『ユーモアの社会学』（世界思想社，1996年）などがある。

【特集 笑いを学問する】

## 『笑いの哲学』その後

木村 寛

拙著『笑いの哲学』（講談社、2020年）が出版されて、5年が経ちました。それ以来、笑いをめぐる騒動が起きるたびにコメントを求められるようになりました。その多くは、笑いと暴力との関係をめぐる問題でした。

例えば、アメリカのアカデミー賞で、クリス・ロックというコメディアンがジョークで妻を傷つけたと、俳優のウィル・スミスが生放送の壇上でロックにビンタを喰らわす出来事が起きました。そして、どちらが悪いのか、笑いの暴力と身体の暴力が天秤にかけられることになりました。アメリカでは、身体の暴力を冒したスミスに謝罪を要求しましたが、大学でこの話をする、身を挺して妻を庇ったスミスに同情する学生が多く、驚きました。身体の暴力よりも笑いの暴力の方が悪い、そう考える傾向が強いのがいまの日本であるとわかった事案でした。

笑いの暴力性は、『笑いの哲学』で言えば、「優越の笑い」と関連します。他人が不格好さをあらわにしたとき、自分のことはさておいて自分はそうはならないと自分を優位に据え、他人を劣位に置いて笑う。そうやってひとは笑うのだとホップズは言い、その後、「優越の笑い」と呼び慣わされます。笑われたら辛いという心性は、この笑いがもたらすものです。

1年前には、容姿ネタは是か否かという問いで大手新聞社2社から取材を受けました。一昨年、M-1グランプリでシシガシラのハゲネタが一躍注目を浴びたことが背景にありました。失恋の歌をハゲの脇田が歌うと、相方の浜中の心の中では失った頭髪を憂いているように聞こえてしまうという、ハゲを笑っているのではなく、なくした恋人＝頭髪と思い込んでいる浜中の偏狭な思考回路を笑うネタを作り、それが功を奏して大ウケしたわけです。ベタに禿げたひとを「ハゲ」と笑うのは笑えないという時代に応えたネタなのですが、しかし、視聴者から「頭髪の薄い人を揶揄する言葉を連発した」との批判が放送倫理・番組向上機構（BPO）に寄せられ、青少年への影響を検討する委員会では取り上げられたといえます。

重要なのは、こうした笑いを「ルッキズム」の名目で批判するひとの多くも、当の「ルッキズム」に囚われている点です。「ハゲ」と言われては可哀想という思考にはルッキズムが混ざっています。「（そう思っている）言っちゃいけない」の思考にもルッキズムは残っているし、「思ってもいけない」では一層息苦しい社会になってしまうでしょう。要は、残留している「ハゲ」＝「不格好」＝「可哀想」という思考から自由になること、その等号のことがどうでも良くなる心性が大事なのです。

私が取材を受けた新聞記事のなかで、チキチキジョニーというブスネタを多用する漫才コンビは、こう言っています。「『容姿に自信がない』『傷つくからやめろ』という人の気持ち、私は分かる。でも本当は、そういう人にこそ、笑いで心を軽くすることもできるんやって気づいてもらえたら」。こうした論点を『笑いの哲学』では、綾小路きみまろや毒蝮三太夫とファンとの関係をめぐって考察しました。彼らの毒舌がそれを向けられた（主として）中高年女性たちを元気づけ、彼女たちの心を軽くするのはなぜか。笑いは毒でもあるけれども、同時に解毒の力も持っているのです。笑いを毒だと思えば解毒ができなくなるのですが、日本は年々解毒ができない社会に向かっているのではないかと危惧しています。

私は、幼稚園児のコミュニケーションがひとつの理想ではないかと思っています。彼らが生きているのはいわば「遊びの空間」です。それを構成するのは、私のものでありつつ私のものでないような、相手のものでありつつ相手のものでないような、そうしたグレーのものたちでしょう。私を「私」と思い、相手を「相手」だと思っている間は、遊びは始まりません。私を泥棒と思い、相手を警察と思わなければ、ドロケイは始まりません。相手が叩いてくるからって「痛い」と怒り出したら、遊びは終わります。警察役だからといって泥棒を「痛い」と思われるまで叩いてはならないのです。その塩梅がとても重要なのです。その痛みは、遊びが遊びであることを邪魔してきます。けれども難しく面白いところは、どこまでの痛みが遊びを邪魔するかなど、その塩梅の範囲を客観的に数値化できないという点です。ケース・バイ・ケースなのであって、時と場合によるのです。

いまの世の中は、遊びよりも「痛い」の訴えの方を擁護しがちです。もちろん、痛いことを我慢しなさいというつもりはありません。けれども、遊びを本気と取り違えることがつづくと、遊びが居場所をなくしてしまいます。「ドロケイ」の空間に2人がダイブする（没入する）には、遊びの条件を2人が担保していることが重要なのです。笑いも同様です。

最近、心理学者のウィニコットを知り、上記したことは、彼の思考から影響を受けています。遊びは、文化を滋養し創造する場です。笑いとは遊びの危機は、文化の危機なのです。

執筆者について――

木村覚（きむらさとる） 1971年生まれ。現在、日本女子大学教授。専攻＝美学、パフォーマンス批評。主な著書には、『笑いの哲学』（講談社、2020年）、『スポーツ／アート』（共著、森話社、2020年）などがある。

【特集 笑いを学問する】

## 笑芸と「限界学問」

鈴木亘

笑いを誰が、どのように学問するのか。ここでは笑いを主眼とした演芸、笑芸についてそれを考えたい。鶴見俊輔はかつて漫才論『太夫才藏伝』において、漫才の源流である「万歳芸」についてこう語っていた。「支配者のなめらかなことばは、それをあやつれない民衆にとっては、一種の暴力である。これに対する沈黙にかざりをあたえたものが、形のくずれたことばとしての万歳芸だった」<sup>(1)</sup>。もし学問というものが、支配者の「なめらかなことば」——現代日本で言えば、標準語をもとにした書き言葉として制度化された言葉——を用いてなされるものであり、対象をとくに暴力的に裁断する力を持っているならば、支配者をのりくらしやり過ぎつつ抵抗する民衆の芸である笑芸は、それでも学問とどのような関係を結びうるだろうか。

笑芸／学問。しかしながらすぐさま付け加えなければならないのは、この二項対立をものともしない実践がこれまで芸人の側からいくつもなされているということだ。すなわち学者に先立って芸人たちが自身が、笑芸を語の正当な意味において学問的に探求しているのである。例えば上方においてすでに戦前、落語家の五代目笑福亭松鶴を中心とする同人「楽語荘」が雑誌『上方はなし』を刊行（1936-40年）、多数の落語速記や評論を掲載していた。この業績は単に芸人の趣味的な余興にとどまるものではない。むしろそれは、吉本興業による漫才のフックアップと落語の等閑視——吉本興業は新興の笑芸である漫才が都市生活者の人気を博しはじめていると見るや、寄席の軸足を落語から漫才に移していた——に対する抵抗であり、かつての威勢を失いつつあった落語を芸術として顕彰・保存しようとする奮闘だった。『上方はなし』創刊号の「巻頭言」がそのことをはっきりと語っている。「落語界の衰微ということがしきりに云々される。漫才興隆して落語は凋落すともいわれる。いわれるばかりでなく、事実が既にこれを雄弁に物語りつつある。[……] だからといって、しかし、落語が無価値だという結論には決してならないことはもちろんである。落語の芸術的価値というものは、そんなこととはかけ離れて、毅然として高い水準の上にある。それは決して詭弁ではない。いわんや、負け惜しみでは断じてない。そのことの証明を一々指示していこうとするのが本誌の第一の使命である」<sup>(2)</sup>。落語に対する学究的態度というこうしたエートスに、戦後における上方落語の復興は支えられている。三代目桂米朝は滅びかけていた演目を復活・再構成し、考証の成果を『上方落語ノート』にまとめた。さらに米朝の弟子である二代目桂枝雀は、笑いを「緊張の緩和」と定義しつつ、落語の落ちを「ドンデン」・「謎解き」・「へん」・「合わせ」の4象限で考える分類法を提唱した。米朝も枝雀も、自ら落語を演じつつそれを俯瞰的に捉え、客観的に記述しようとする学問の姿勢を体現している。

学問的態度がそうしたものであるならば、笑芸そのものがすでにそれを内包しているとも言える。鶴見俊輔に戻れば、彼は漫才の特徴的な主要素をなす他業種・他領域の「パロディー」について、その意義を次のように語っている。「漫才はそういうさまざまな職業の断片をつづりあわせた表現形式で、その故に他の専門職よりも自由な仕方、あれになりこれになりして、現代の日本社会を身ぶり手ぶりでなぞって再現・批評して見せる。そのパロディー（もじり）が批評の方法となっている」<sup>(3)</sup>。笑芸がパロディーを通して行っているのは非専門職ゆえに可能な批評的实践であり、その精神は学問においては、まさにアマチュアリズムという形容を与えることができるだろう——「限界芸術」の観

念を提唱した鶴見はいみじくも、非専門家によって、専門領域と日常的領域のあわいにおいてなされる学問を「限界学問」と肯定的に名づけていた<sup>(4)</sup>。してみると笑いは「限界学問」の最良のテーマのひとつなのだろう。

【注】

- (1) 鶴見俊輔『太夫才蔵伝——漫才をつらぬくもの』平凡社ライブラリー，2000年，281頁。
- (2) 「巻頭言」，五代目笑福亭松鶴編『上方はなし（上）』，三一書房，1971年，12頁。なお議論の展開は別稿に譲るが，ここですでに落語が「芸術」の範疇において考えられていることが興味深い。
- (3) 鶴見俊輔『太夫才蔵伝』，前掲書，20頁。
- (4) 鶴見俊輔「著者自身による解説」，『限界芸術論』ちくま学芸文庫，1999年，445頁。

執筆者について——

鈴木亘（すずきわたる） 1991年生まれ。現在，東京大学大学院人文社会系研究科助教。専攻＝美学。小社刊行の著書には，『[落語と学問する](#)』（共編著，2025年），主な訳書には，ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン『[受肉した絵画](#)』（共訳，2021年），同『われわれが見るもの，われわれを見つめるもの』（共訳，2024年）などがある。

【特集 笑いを学問する】

## 可笑しみを通して自己に気づく

八重樫徹

可笑しみを感じていないときでも人は笑うし、可笑しみを感じていても笑わないときがある。私は目に見える動作としての笑いよりも、可笑しみそのものに関心がある。「可笑しみ」という表現は、人の情緒的反応を指すこともできるし、その対象となるものごとの性質を指すこともできる。どうしても可笑しみを感じてしまうとき、私はものごとに意識的・主体的に反応するのではなく、状況に巻き込まれており、ある意味で自己を失っている。笑ったり笑いを堪えたりした後で、可笑しみを感じた自己を見出す。そのような可笑しみの経験の場で何が起きているのかに、私は関心がある。

映画『教皇選挙』（2024年）では、何度目かの投票の最中、主人公・ローレンス枢機卿が意を決して票を投じようとするその刹那、砲弾がシスティーナ礼拝堂の天井を直撃し、（以下スローモーション）瓦礫と埃が舞い、枢機卿たちが床に倒れ、薄暗かった堂内に日光が差し込む。ここで私は笑った。なぜ可笑しみを感じたのだろうか。

よく知られた笑いの理論に「緊張の緩和」理論がある。カントいわく、「笑いは、緊張した期待が突然無に転化することから生じる情緒である」（『判断力批判』）。二代目桂枝雀によれば、「すなわち『緊張の緩和』がすべての根本なんですわ。はじめグーッと息を詰めてパーッとほき出す。グーッと『緊張』でパーッと『緩和』です」（『らくご DE 枝雀』）。

『教皇選挙』の上記の場面は「緊張の緩和」の見事な実例である。このことは私が可笑しみを感じたことを部分的には説明してくれる。しかし、私の周りに笑っている観客はいなかった。聞いて回ったわけではないが、可笑しみを感じた人からして少なかったのではないだろうか。その部分的な原因は、観客がこの映画をシリアスな政治劇として観ていたことにありとえられる。だが、緊張が突然無に転化することが可笑しみを生むのだとすれば、コメディよりもサスペンスの方が可笑しみを生みやすいのではないか。

『ボーはおそれている』（2023年）は私が映画館で声を出して笑った数少ない映画の一つである。冒頭で精神科医の診察を受けたボーが自宅に帰る。彼が住む地区は極度に誇張されたスラムであり、酒に酔っているか薬物を使用していると思いき人々が徘徊している。向こうからボーが全速力で走ってくる。全身タトゥーの男が彼に気づき、追いかけてくる。ボーはアパートのエントランスに駆け込み、すぐさまドアを閉めて男の侵入を防ぐ。ボーは呼吸を整えながらエレベータに向かう。私はまずここで笑ってしまった。

これも「緊張の緩和」の実例だが、状況が極度に誇張されていることもあって、『教皇選挙』の例よりもはっきりとコメディ的だと言えるだろう。しかし、私の目に入った限りでは、やはり他の観客は笑っていなかった。これも観客の鑑賞態度、つまり作品をどのような映画として観ているのかによって部分的には説明できる。観客は「あの『ヘレディタリー』『ミッドサマー』のアリ・アスター監督の新作」を観にきているのであって、恐怖への心構えはできていても、笑う準備はできていなかっただろう。そして上記のシーンの直前では、精神疾患を抱えたボーの深刻な様子が描かれる。当該シーン自体、ボーの悲惨な住環境を観客に示す役割もあるのだから、神妙な顔つきで観るべきと言われればそうかもしれない（だが、その神妙な顔つきは何の表れなのだろうか。共感だろうか）。

だが、可笑しみとは本来、こちらが笑う準備ができていようがいまいが、やって来るときにはやって来るものである。笑う準備ができていない状態とはある種の弛緩状態である。そこでは上記の映画のシーンにあるような類の「緊張の緩和」は生じにくい。多くの人は弛緩の中の笑いに馴らされていて、(あえてこう言うが) 本物の「緊張の緩和」による可笑しみを受け止めることができなくなっているのではないか。逆説的に言えば、それは笑う準備ができていると同時に、襲ってくる可笑しみに対して自らを閉ざしている状態なのかもしれない。

可笑しみを先取りしていないときに突然訪れる「緊張の緩和」、そしてそれによって思いがけず噴き出す笑いは、笑ってしまった自分に視線を向けるきっかけにもなる。周囲の人は笑わず、自分だけが笑った場合はなおさらである。ここで笑ってしまう私はどのような人間なのか。私の中のどのような経験の沈殿が、目下の場面で可笑しみを感ずることを可能にしたのか。このような問いを自分に向けるなら、ときには忘れていた過去の経験を思い出すこともあるだろうし、ときには偏見に気づくこともあるだろう。弛緩した状態で周囲の人と一緒に安心して笑うときには、この種の問いや発見は生じないだろう(だからといってそのような安心した笑いが無価値だとは思わないが)。思いがけずやって来る可笑しみに対して開かれていること。それは自己への気づきに開かれていることでもある。

執筆者について――

八重樫徹(やえがしとおる) 1982年生まれ。現在、宮崎公立大学准教授。専攻＝初期現象学、倫理学。小社刊行の著書には、『[フッサルにおける価値と実践――善さはいかにして構成されるのか](#)』(2017年)がある。

【特集 笑いを学問する】

## 笑いとユーモアの4段階と滑稽の理論

雨宮俊彦

「体内で起こる痙攣で、顔の造作を歪めるとともに不明瞭な騒音を伴う。伝染しやすく、断続的に起こるが、治療の方法がない」。アメリカの作家ビアスは『悪魔の辞典』で笑いをこう定義した（Bierce 1911）。

誰もが笑いを経験する。しかし、冷静になって考えてみると、笑いは、とても奇妙な行動である。人はなぜ笑うのだろうか？ 笑いとは何だろうか？

フランスの哲学者ベルクソンは、笑いについて「アリストテレス以来、もっとも偉大な哲学者たちがこの小さな問題と取り組んできたが、この問題は常にかれらの努力の下をすりぬけ、逃げ去り、身をかかわしては立ち直ってしまった。哲学的思索に投げかけられた、こしゃくな挑戦である」と評した。

ベルクソンは、自身の生命哲学の観点から笑いを生命のしなやかさによる機械的こわばりの是正としてとらえた。今日のユーモア研究ではズレ理論と言われる立場である（雨宮 2016）。ベルクソンの『笑い』は自身の生命哲学を背景とし、聾啞の娘さんとの交流で経験したパントマイムの事例をあげるなど、魅力的な小著である（Bergson 1900）。しかし、機械的とみなされる軍の行進を優美にしなやかに行ったとしたらやはり可笑しいだろう。ベルクソン生命哲学の予測とは異なって、笑いは必ずしも生命のしなやかさによる機械的こわばりの是正だけではないらしい。笑いはベルクソンの手をもすりぬけてしまったようだ。

ベルクソンの笑いと共に20世紀の笑い研究の双璧と言われるのが、フロイトのジョーク論である。フロイトのジョーク論もベルクソンと同様に自説である精神分析の心的エネルギー説と抑圧説に基づいている。例えば『機知』（1905年）では、親戚の富豪から Famillionar（= Familiar + Millionaire）に扱ってもらったというハイネ（ハイネの妻の実家は実際に百万長者で、ハイネは貧乏な詩人の娘婿としての疎外感を味わっていたらしい）などのジョークが詳細に分析されている。フロイトによるとジョークの快は、形式の快と抑圧解除の快の2要因からなっていて、形式の快が呼び水で、抑圧解除による余剰エネルギーがジョークの快の本流である。ハイネの例では、〈Famillionar = Familiar + Millionaire〉という詩人としての言葉遊びの見事さが呼び水の快である。抑圧解除は、富豪とのつきあいへの嫌悪感と攻撃を社会的に不適切として余計なエネルギーを費やして抑えなくとも言葉遊びの見事さの快と紛らわして表出してしまえるということである。このように、フロイトのジョーク論では、巧みな表現の快が呼び水になるが、ジョークの快の本体は攻撃性や性的タブーなどの抑圧に要するエネルギーがジョーク表現によって不要となり、抑圧の節約による余剰エネルギーがジョークの快の本体として経験されるとした。これは精神分析理論に基づく巧妙な理論化である。フロイトの説が正しいのなら、抑圧が高い人ほど抑圧の解除による快が大きいことになる。そこで、性や攻撃性に関する抑圧の度合いを測定し、性的ジョークや攻撃的ジョークの愉快さを評定する実験が行われた。実験してみると、当たり前という感じもするが、抑圧仮説とは逆に、性や攻撃に関する抑圧が弱く性や攻撃にオープンな人ほど性的ジョークや攻撃的ジョークを愉快に感じるという結果だった（雨宮 2016）。呼び水と快の本体という発想はよかったが、精神分析の抑圧仮説はここでも妥当ではなかったようだ。ベルクソンもフロイトも、自説に基づいて笑いをとらえようとしたが、20世紀を

代表する生命哲学と精神分析でも笑いにはとらえきれない部分がのこったということだろう。基本はそうなのだが、筆者の眼からすると、21世紀の笑い理論を目指すうえではフロイトの方に一日の長がある。これは、フロイトにおいてはジョーク論が中心だが、ショーペンハウアーやジャン・パウルなど先哲の研究を参照して、滑稽やジョーク、自己客観視のユーモアなど笑いとユーモアの多様性を把握している点にある。ただし、自己客観視のユーモアについては、叱責・禁止だけでない超自我の働きに言及する程度で、滑稽については先学の見解が様々だと指摘し、説明は難しいと述べるに留まっている。また、遊びについてはほとんど言及されていない。

筆者は、以上の考察に基づき、じゃれ遊びから自己客観視のユーモアにいたる笑いとユーモアの4段階説の提示を試みた（雨宮 2016, 表 1）。

|            | 原ユーモア | 滑稽         | 機知            | （狭義の）ユーモア  |
|------------|-------|------------|---------------|------------|
| メッセージの人称構造 | 相互行動  | 二者関係の（主・客） | 三者関係の（主・客・聴衆） | 再帰的（自らを笑う） |
| 成立時期       | 哺乳類   | 乳幼児期       | 学齢期           | 青年期        |

表 1 笑いとユーモアの 4 段階

じゃれ遊びは、笑いの基盤であり、原ユーモアとも言える。原ユーモアでは、笑う側と笑われる側が未分離で、遊びの気分でじゃれ合いながら興奮して、ともに笑うという状態である。動物が笑うのは互いにじゃれ合っているときで、意図して他の個体を笑わせたり、他の個体の失敗を笑ったりすることはない。これらは、人間の段階で高度に発達し幼児にも可能な意図の相互理解が必要になるためである。人間の幼児になると、二者関係のなかで相手の意図をもてあそんだり、滑稽なことをして人を笑わせたり（幼児のおどけ）、他者の失敗や滑稽を笑ったりするようになる。

レディの研究には、大人と同様のおどけ（clowning）を 2, 3 歳児が活発にすることが豊富に記載されている（Reddy 2008, 表 2）。レディは、これを二人称的アプローチでとらえられることを強調しているが、ここは進化論的観点から他個体の意図理解や集団における意図共有として位置づけた方が今後の理論展開の上では適切だろう（Tomasello 2022）。

|           | 大人のおどけ                            | 幼児のおどけ                                                                                                                                        |
|-----------|-----------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 奇妙な身体の動き  | ころぶ、すべる、おかしい歩き方、奇妙なダンス            | 頭を首の方にひっこめる、頭をふる、頭をぐらぐらさせる、おかしい歩き方、自分を投げ出す                                                                                                    |
| おかしい表情    | おかしい目の動き、誇張されたほほえみ、頬につけた点         | 顔をゆがめる、下唇をつき出す、目をぐるぐる回す                                                                                                                       |
| 奇妙で大きな音   | バンという音、金切り声、唸るような声                | ぎゃーぎゃー泣く声、ガーガーいう音、金切り声、にせの咳、にせの笑い、「ばあばあ」と言う                                                                                                   |
| ばかげたことをする | 自分をたたく、自分の顔にパイを投げる、ホースで人に水をかける、など | 母親の頭をたたく、脇の下からのぞく、人のつま先をかじる、母親の口におしゃぶりをつつこむ、母親のタイツをひっぱる、母親の肌をひっぱる、くさい足を持ち上げる、兄弟の膝にキスをする、親指を口に入れる、つま先にふれる、おもちゃのアヒルを口に入れておかしい表情をする、人に水をひっかける、など |

表 2 大人と幼児のおどけ

ここで着目されるのは、人間におけるおどけの展開が 2, 3 歳という言語と同じ時期に生じていることである。言語については、トムが関連性理論など意図推測的コミュニケーションの観点から、人

の言語進化を理論化している (Thom 2015) が、人の言語は 2, 3 歳から発達するのに、他個体の意図理解の標準的課題である誤認テストをパスするのが 4 歳以上だと事実との矛盾が指摘されている。トムは文脈の重要性を指摘し誤信課題の妥当性に疑問を呈しているが、おどけと言語発達の同期は今後追及すべき重要な課題だろう。

#### 【参考文献】

- 雨宮俊彦 (2016) 『笑いと言語の心理学——何が可笑しいの?』, ミネルヴァ書房。
- Bergson, H. (1900) *Le rire, essai sur la signification du comique*. (林達夫訳『笑い』, 岩波書店, 1976 年)
- Bierce, A. (1911) *The Cynic's Word Book*, Neal Publishing. (乾幹夫訳『悪魔の辞典』, 大学書林, 1985 年)
- Freud, S. (1905) *Der Witz und seine Beziehung zum Unbewußten*, Fischer Taschenbuch-Verlag. (懸田克躬訳『機知——その無意識との関係』, 人文書院, 1970 年)
- Freud, S. (1928) Humor, *International Journal of Psychoanalysis*, 9, 1-6. (高橋義孝訳『ユーモア』, 人文書院, 1969 年)
- Reddy, V. (2008) *How infants know minds*, Harvard University Press. (佐伯胖訳『驚くべき乳幼児の心の世界』, ミネルヴァ書房, 2015 年)
- Thom, S.-P. (2015) *Speaking Our Minds: Why human communication is different, and how language evolved to make it special*, Palgrave Macmillan. (畔上耕介ほか訳『なぜヒトだけが言葉をはしゃぐのか——コミュニケーションから探る言語の起源と進化』, 東京大学出版会, 2021 年)
- Tomasello, M. (2022) *The Evolution of Agency: Behavioral Organization from Lizards to Humans*, MIT Press. (高橋洋訳『行為主体性の進化——生物はいかに「意思」を獲得したのか』, 白揚社, 2023 年)

執筆者について——

雨宮俊彦 (あめみやとしひこ) 1954 年生まれ。関西大学名誉教授。専攻＝心理学, 記号論。主な著書には、『笑いと言語の心理学——何が可笑しいの?』(ミネルヴァ書房, 2016 年), *Kansei Semiotics of Manga Expressions*, Globe Edit, 2019 などがある。

# 水声社の新刊

(2025 / 6 / 30)

## 【7月の新刊（予定）】

### ジョージ・オーウェル『一九八四年』の現在地

——文学・思想・メディアの交差点

ネイサン・ウォデル編 近藤直樹＋福西由実子＋大木ゆみ監訳

佐藤義夫＋高橋一馬＋中村麻美＋前津朋子＋渡辺浩訳

【7.29 発売】

▶オーウェル没後七十余年、権威主義が新たな力を得る混迷の現代に、改めて『一九八四年』に焦点をあて、この小説の意義について歴史、教育、難民、独裁、労働、音楽、映画、漫画、ゲームなど多面的な視座から論じた最新論文集。

A5 判上製／456 頁／7000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0880-9



### スペイン文明論集 I [文学・言語篇]

アメリコ・カストロ 本田誠二編訳

【7.29 発売】

▶セルバンテス、ロペ・デ・ベーガ、サンタ・テレーサ……西欧文明とイスラーム文明の狭間で育まれた〈スペイン性〉の輝きを、黄金世紀文学や神秘主義的著作の精読を通じて描き出す、二十世紀スペイン屈指の歴史家＝文芸批評家の本邦初訳の論文を集成。

A5 判上製／664 頁／10000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0842-7



### スペイン文明論集 II [歴史・文化篇]

アメリコ・カストロ 本田誠二編訳

【7.29 発売】

▶〈衰退するスペイン〉への危機意識のもと、スペイン民族の核心を把握し直すべく、キリスト教徒・ユダヤ教徒・イスラム教徒の共存と対立という特異な環境の下で編まれたスペインの歴史・文化を、独自の視点から解明する論文を集成。

A5 判上製／740 頁／10000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0843-4



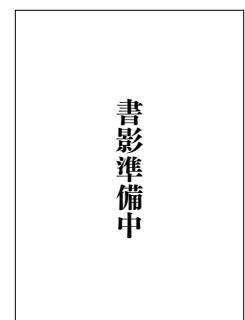
### ギルウヘパの懐剣——ツタンカーメンとその系譜

瀧脇千恵子

【7.29 発売】

▶ミタンニ王国から贈られた懐剣の謎をさぐり、政略婚を通じて確固たる地位を築くアメンヘテブ三世、アテン神信仰のアケナテン、黄金のマスクで知られるツタンカーメンら第十八王朝のファラオをとりまく王妃、側室、神官、官吏の人間模様を生き生きと描く歴史小説。

四六判上製／280 頁＋カラー別丁 4 頁／2800 円＋税 ISBN：978-4-8010-0854-0



## 【6月の新刊（既刊）】

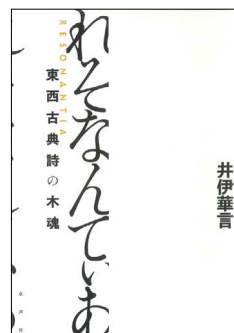
### れそなんていあ——東西古典詩の木魂

井伊華言

【6.4 発売】

▶ギリシア・ラテンから古代中国、日本まで、古典詩人約80名の作品に、戯評・感想・パロディからなる詩による返答＝〈れそなんていあ〉を詠む、前代未聞の詩集。元西洋古典学徒・奇人井伊華言老がこの世の名残に放つ〈最後っ屁〉。

A5判上製／177頁／3000円＋税 ISBN：978-4-8010-0873-1



## 異邦人のフランス語圏文学

——立花英裕と「世界－文学」の想像力

谷昌親＋中村隆之編

【6.23 発売】

▶ロートレアモンから出発して、マルティニック、ハイチ、ケベックの文学へと多様に展開された、知の越境者の旅路。歴史の他性に開かれた文学的思考から、われわれは何を受けとるべきか。ネーションへの同化でもなければ、グローバル化の伸展でもない、時空の異なる作品に張り巡らされた世界の複数性を読解する。

A5判上製／464頁／6500円＋税 ISBN：978-4-8010-0878-6



## 都市のコラージュ——美術・生活・歴史

坂上桂子編

【6.23 発売】

▶人々が土地を切り拓き、立ち止まり、交わり、住み着き、また通り過ぎゆくなかで、歴史は絶え間なく堆積し、都市の姿が立ち上がる。市場、街路、家屋、銅像、詩篇、雑誌、Web画像、グラフィティ、シアター、モニュメント……記憶・文化が織り成す動的な現象としての都市をさまざまな断片から読み解く試み。

A5判上製／336頁／5000円＋税 ISBN：978-4-8010-0877-9



## 異説ダダ・シュルレアリスム

塚原史

【6.27 発売】

▶ダダ・シュルレアリスムにまつわる「通説」を退け、100年の時を経た現代においてアヴァンギャルド運動に新たな息吹をもたらすべく、ツァラ、ブルトンの知られざる一面に光をあて、よりラディカルな運動レトリズムの可能性を論じる、過激なガイドブック。

A5判上製／464頁／6500円＋税 ISBN：978-4-8010-0841-0



# 抽象表現主義——戦後ニューヨークの前衛芸術家たちはいか

にして自分たちの歴史を自分たちで作ったか

大島徹也

【6.27 発売】

▶美術学校運営、討論会、抗議運動、集会所設立、展覧会企画……ときに対立しながらも芸術家たちが自主的に取り組んだ知られざる集団活動、〈抽象表現主義〉。その考察を通して、新たな抽象表現主義史を提示する。

A5 判上製／404 頁＋別丁 1 頁／6000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0876-2



# 哲学以後の芸術とその後

——ジョゼフ・コスース著作集成 1966-1990

《叢書 芸術／言語》

ガブリエレ・グエルチョ編 鍵谷怜訳

【6.27 発売】

コンセプチュアル・アートの旗手が紡ぎ出す思考の軌跡。芸術の哲学的・言語学的転回を印づけた記念碑的作品「哲学以後の芸術」をはじめ、引用のみからなるテキスト「27 個のパーツからなる論説」、人類学への深い関心を記した「人類学者としての芸術家」など、45 編を収録。

A5 判上製／512 頁＋別丁 36 頁／8000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0874-8



水声社

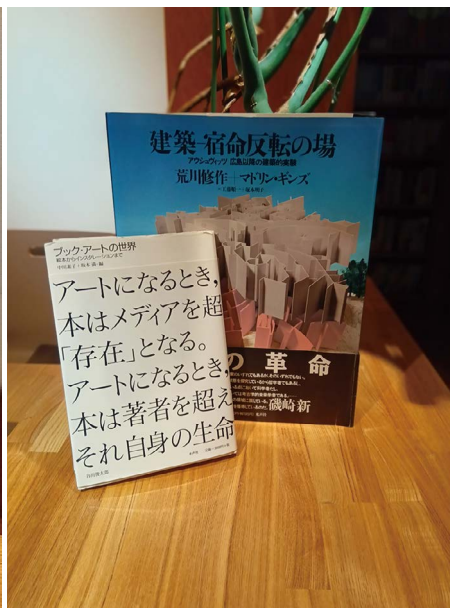
東京都文京区小石川 2-7-5 tel. 03-3818-6040 / fax. 03-3818-2437 eigyo-bu@suisaisha.net

# ブックカフェ



本の庭  
le Jardin des livres

# 本の庭



緑と本に囲まれて、憩いのひとときをお過ごしいただける、都内でもまだ緑の多く残る山王のブックカフェ『本の庭』に夏がやってきました。メジロ、キジバト、ヒヨドリ、シジュウカラも訪れます。『本の庭』では、水声社の本を展示販売しており、新刊は本屋さんの店頭に並ぶより、10日から1週間ほど早く入荷します。「できる限り手作りの物を」をモットーに、パニーニやケーキ、など、店内の本をご自由にお読みいただきながら召しあがれる軽食、焼菓子や各種スイーツやお飲み物をご用意しています。車椅子やベビーカーでお入りいただけます。テラスでは、ワンちゃんと共に過ごすことができます。

## 【カフェの情報】

住所：東京都大田区山王1-22-16

アクセス：JR 京浜東北線大森駅 山王北口より徒歩7分

営業時間：木・金 12時～18時、土・日 11時～18時。ただし第1・第3日曜日は12時開店です。

営業日：木・金・土・日（詳しくはInstagramをご確認ください。）

臨時休業：4月24日木曜日は臨時休業です。（詳しくはInstagramをご確認ください。）

TEL：070-4171-0860

店内設備：スロープを設置できますので、車椅子のままご来店いただけます。

Free Wi-Fi



本の庭  
le Jardin des livres

(広告)